

中学生報告書

平和への考えを深めるために

豊島区立駒込中学校 2年 古田 芽生

私が長崎派遣事業に参加した理由は、平和について真剣に向き合いたかったからだ。今まで平和に関するような本やニュースはいくつも見てきたが実際に外国で起きていることは平和とはかけ離れているほどのものだったため、平和について理解ができていたとは思えなかった。だから、今回の派遣事業に参加することにした。

まず長崎の原爆被害を受けた今道忍さんの話を伺った。私は今道さんが話してくださった話が、とても印象に残っている。80年前の8月9日に起きた長崎を包んだ火の海。その影響で友達の農家に疎開しなければいけなくなった今道さんは、徒歩で向かっている内に様々な死体を目にした。爆撃を受けた馬の死骸や、焼けた家。その中には明かりのついた焼けた家があった。今道さんご家族はその家の人を見つけ寄ったところ、小屋に跳び箱を見つけた。今道さんが家だと思っていたものは、本当は学校だったのだ。私は、学校だったものが家のように小さくなるほどの威力をもつ原爆が怖くなった。

長崎原爆資料館には、当時原爆を受けたものが残っていた。その中で私が印象に残っていたものは、女性の水筒の話だ。女性は当時三歳のときに原爆を受けた。原爆投下後、女性が自分の父を探しに行くときに母が持たせたもの、それが金属製の水筒だった。その後に女性が父を見つけたとき、父は足に重いやけどを負っていたらしい。女性はその当時の苦い記憶を思い出したくなく、長崎原爆資料館に水筒を寄贈した。私は記憶に蓋をしたいくらいの火傷は想像ができないが、女性が手元に置いておきたくないほどひどいものだろうと思い、この水筒の話が印象に残った。

私は長崎派遣事業に行って、平和について深く考えることができた。私は被爆者の今道さんが最後に言った「一人一人が平和について願う」という言葉が響いた。今道さんが言ったこの言葉には、小さな平和は大きな一歩という意味が込められている。被爆者の方々は、平和を深く願っている。今私達が平和について考えていくことも、この言葉のように平和への大きな一歩になるのではないか。

ナガサキを最後の被爆地に

豊島区立駒込中学校 2年 長島 希和

私は小学生の頃、広島原爆資料館等の施設見学やVR体験型ガイドツアーに参加し、原爆だけでなく戦争がもたらす悲惨さを痛感したことから長崎での実情も深く知りたいと考え、今回の事業に参加しました。

被爆体験者講話では、原爆の影響を伝える活動をしてきた今道さんに当時の悲惨な状況についての話を伺いました。原爆は爆風や放射線で単にひどい傷を負わせるだけでなく、被爆という事実からくる恐怖心や差別などの精神的な被害がとても大きいとおっしゃっていました。「どんなに小さなことでも自分ができる平和を見つけていってほしい。一人ひとりが小さな平和を繰り返していくことでいつか幸せな瞬間は来る、また、平和とは戦争をなくすだけでなく、人を愛することが一番大切で平和に繋がることだ。」と私達に伝えてくださいました。

長崎平和祈念式典の会場を見渡し、参列する方、各国の要人、スタッフや警備員の方々等の大勢の人々がこの平和の式典に臨んでいることを目の当たりにし、背筋が伸びる気持ちになりました。式典で合唱された長崎県出身の福山雅治さん作「クスノキ」。「我が魂は 奪われはしない」という歌詞からつらい状況に負けまいとする人々の強い思いや、被爆時の悲惨な状況を想像させられる力強い信念の曲であると感じました。

今回の事業に参加し、協力して下さった多くの方々が、決まって「長崎を最後の被爆地に」とおっしゃっていたことがとても印象的でした。地域全体で団結し、絶対に繰り返してはならないということを常に掲げて活動している姿を見てとても胸が熱くなったと同時にこの信念を私達も後世に繋げていかなければならないのだと改めて実感しました。日々、私達が当然のように生活できているこの日常が決して当たり前ではないということ、さらにこの日常こそがかけがえのない日々であることを常に心に留めて感謝しつつ、これからは多くの人々に発信していきたいと思えます。



中学生報告書

80 年間

豊島区立巣鴨北中学校 2年 佐藤 優希

誰もが幸せに暮らす平和な世界であってほしい。そう考えて私は長崎派遣事業参加を希望しました。

まず平和公園と長崎原爆資料館では、原爆がどれほど理不尽に命を奪い、街を焼き尽くしたのかを学びました。原爆の熱線は鉄を溶かす以上の熱で全てを燃やしたことを知りました。破壊された壁。焦げた弁当箱。溶けた瓶。それらを見るたびに原爆によって引き起こされた痛み、恐怖、絶望。突然奪われ、永遠に失われた何気ない日常の幸せ。別れの言葉すらかけられず二度と会えない大切な家族。人々の悲しみが伝わり、私は言葉を失いました。

次に平和記念式典では、多くの人々が「長崎を最後の被爆地にしてほしい」と祈り続けてきたことを知りました。そして原爆が落とされた8月9日11時2分。黙とうを捧げるとき、私も、多くの人々と一緒に、心の中で、「もう二度と核兵器の悲劇が起こりませんように」と強く祈りました。この祈りを絶対に実現させたいという思いがこみ上げました。

最後に被爆体験講話では、今も心に深い傷と痛みを抱えていたことを知り、胸が痛みました。そして「戦争は人を殺すことが使命である」という証言を聞いた時、涙がこみ上げました。戦争では国が違うだけで、その命を奪うことが「使命」になる。私にはそれが理解できないし、多くの何の罪もない人々が命を落としたことが許せません。でも80年間。私たちがそのような使命を受けることなく保たれてきた日本の平和。それは、こういった証言を続けてきた戦争の悲惨さと平和の大切さを訴えてきた人々の努力の成果だったのだと実感し、それを引き継ぎ、平和を守る責任を強く感じました。被爆者の方々の「戦争を語り継いで風化させないでほしい」という思いを受け取った私は、あの日の痛みと悲惨さが色あせないよう、今自分にできることを実践し、世界平和を実現させるために、これからも行動し続けることを心から誓います。

中学生報告書

平和の実現

豊島区立巣鴨北中学校 2年 福崎 よつば

私がこの事業に参加した理由は、戦争について知るためだ。なぜ原爆投下や戦争が起こってしまったのか、なぜ今も続いているのか十分に理解したいという思いで参加した。

長崎原爆資料館では、原爆を落とすときの映像や変形・変色してしまった多くの品が展示されていた。原爆が落とされた真下にいた人達は、2000度の激しい光を数秒浴び続けたそうだ。私には、2000度の光を浴びたら、どうなるのか想像できなかった。

被爆者の方々の体験談の展示では、水を求める声や大切な人を失って自ら命を絶とうとしている人もいたことを知った。私は、幸い、大切な人を失った経験はないので、今、当たり前と一緒に笑い過ごしている人達がいることがどれだけ幸せなことなのか思い知らされた。真っ黒に焦げボロボロになった衣服の展示を見たときは、本当にあったこととは思えないほど衝撃を受けた。

また、当時小学生だった被爆者の方のお話を聞いた。国民学校に通っていたその方の話では、戦闘の訓練をしていた学年もあったようだ。私は、戦争のせいで、まだ小学生なのに人の命を奪うのが当たり前、というように教えられていたことを知り、現代でももっと人間の命の尊さについて教えてあげるべきだと思った。8月12日に遊ぶ予定をしていた友達が原爆の落ちる数日前に市内に引っ越し、原爆で亡くなったと聞いたときは、一日中泣いたという話をしてくれた先生は、最後に、「どんな小さなことでも一人一人ができる平和の実現に向けて取り組んでほしい」とおっしゃっていた。

私は、中学生長崎派遣事業に参加して、命の尊さや原爆、戦争の恐ろしさについて深く考えることができたと思う。想像を絶するようなことが幾つもあった戦争は、誰のメリットにもならないし、悲しい出来事しか起こらないと私は思う。これからは、今まさに起きている戦争に目を向けながら、平和の実現に向けてできることを考えていきたい。

中学生報告書

平和の尊さ、戦争の悲惨さを知ることから

豊島区立西巣鴨中学校 2年 小屋松 久珠

突然ですが、皆さんは今幸せですか？私は毎日学校に行き、友達や家族と会話ができる何気ない毎日が幸せです。この長崎派遣を通して当たり前のようにある毎日がどれだけ大切なのか深く理解できました。

80年前の8月、広島と長崎に落とされた原子爆弾により日常が一瞬で焼け野原となりました。ご飯の用意や学校の支度、寝ている人もいたかもしれません。終戦から80年の年月が経ち、生存している被爆者や戦争体験者の方々は減っています。そんな世の中で私達はとても貴重な機会をいただき、戦争のことについてたくさんのことを学んできました。

まず初日に原爆資料館に行きました。原爆資料館には長崎型原爆や被爆したときに製鋼所の作業員が着ていた作業服などが展示されていました。また、原爆落下中心地には原爆投下時の地面が実際に残っていました。そこにはお茶碗やペンチなどが変形して散乱しており、その威力がよく分かりました。たった一つの爆弾が沢山の誰かの宝物を奪ったことが伝わってきます。

次の日、私たちは平和祈念式典に出席し、原爆が投下された8月9日11時2分に黙とうを捧げました。実際に80年前にこの地に原爆が落とされ、何十万もの尊い命が奪われたと思うと本当に恐ろしく、とても重い気持ちになりました。しかし、ただ怖いと思っているだけでは悲劇は繰り返されてしまいます。もしも未来に誰も戦争について知らない時代が訪れたら、あの恐ろしさや悲惨さが分からずまた戦争が起きてしまいます。そんな世界を私達の子孫には生きてほしくない、戦争で被害にあったすべての人たちのために、平和の大切さについて語り継ぐ大切さに改めて気づかされました。

今、世界各地で戦争や紛争が続いている中、ニュースで毎日悲惨な戦地を見るたび心が痛みます。自分と同じくらいの年の子が苦しんでいるのを見ると「今も戦争をしている国がある。だが、この事実を他人事だと思ってはいけない。」という思いが長崎派遣を通じて出てきました。被爆講話でお話していただいた被爆当時8歳だった今道さんは「どんな小さなことでもいいので小さな平和を意識してください」と仰っていました。学校生活でも仲間同士で意見が対立したり、友達同士の喧嘩があったりしますが、そのような身近なことからも「小さな平和」を日頃から意識していきたいです。例えば、相手の立ち場になって意見を聞いたり、物事を様々な視点から見たりすることが大切だと思います。「小さな平和」も積み重ねていけば、「大きな平和」に繋がると信じています。世界で唯一の被爆国に生まれた私達が、「小さな平和」を意識して、その大切さを語り継いでいき、世界を導いて平和な世界を目指していきます。

中学生報告書

自分にできる小さなことを

豊島区立西巣鴨中学校 2年 志村 美緒

「自分にとっての平和について考えるだけでも構いません。自分にできる小さなことを、一人ひとりが平和のためにできることを、やっていくことが一番大切です。」

これは、平和案内人の一人である、イマミチさんがおっしゃっていた言葉です。この話を聞いたとき、私は「そんな簡単なことでいいのだろうか」と疑問に思いました。しかし、その後の体験でその言葉の真意が分かったような気がします。

今回の派遣の中で、一番心に残ったのは長崎原爆資料館です。一緒に参加した友人から入館前に話は聞いていたものの、それでも想像を絶する怖さでした。資料館には1945年8月9日11時2分で止まった時計をはじめとする、被爆した方々の遺品などが展示されていました。その一つひとつを見るたびに当時の情景が思い浮かび、心が重くなりました。中でも、被爆直後に撮られた写真は衝撃的でした。文字通り皮膚が焼け剥がれてぶら下がっている女の子。顔の半分に火傷を負っている人。普段、書籍を通じて戦争の知識を得ていた私にとって、よく文中で描かれる状況を実際に写真で見たことは、本当に怖かったです。

その反面、展示をじっくりと見つめていると、まるで館内が1945年にタイムスリップしたような感覚に陥り、怖いはずの写真から目が離せなくなりました。ふと周りを見ると、日本人だけではなく外国人も大勢いることが分かりました。どの人も展示を真剣に見ていて、国を越えて長崎に起きた悲惨な出来事を悲しむ人がいることを心強く思うとともに、イマミチさんが訴えた「自分にできる小さなこと」をしている人というのはこういう人たちのことなのだろうな、と想像をしました。

翌日、私たちは平和祈念式典に参列しました。その中で、長崎平和宣言の後に放鳩の演出がありました。それがとても綺麗で深く感動しました。音楽とともに空に羽ばたいていく鳩たちを見ながら「今、すごく平和だな」と心から思いました。

私一人には一瞬で戦争をなくしたり、世界を平和にする大きな力はありません。しかし、戦争映画やドキュメンタリーをみて、被爆した人たちの体験記を読んで自分なりの平和を考え、周りの人に思いを広めることはできます。そういった小さなことを積み重ねて平和な世界を創っていきたいです。あなたが平和であると感じるのはどんな時か。ぜひ、一緒に考えてみませんか？

中学生報告書

「語り継ぐ思い」

豊島区立池袋中学校 2年 小万 真菜実

私がこの長崎派遣事業に応募した理由は、私の祖母が戦争を体験しているからです。実際に話を聞いたのは私が小さいころだったので、よく覚えていませんが、両親が祖母の話を受け継いでいます。私もその話を受け継ぐ者として、実際に戦争の傷跡が残る長崎へ行き、自分の目と耳で確かめたいと強く思いました。

今回の派遣では、戦争を体験した今道さんのお話を直接聞くことができました。人的被害は今道さんや今道さんの家族にはなかったものの、疎開先に行く途中で、曲がった鉄鋼や、焼け焦げた家、亡くなった人たちを火葬している人々をたくさん見たそうです。当時の様子を語った今道さんのお話は、言葉の一つ一つに戦争の悲惨さや平和の大切さについて考えさせられるような重みがありました。戦争を直接知らない私たちにとって、今道さんのお話は、心に深く刻まれ、平和の尊さを改めて実感する時間となりました。

平和祈念資料館では、中に入った瞬間、ズンッ、と急に空気が重くなるのを感じ、被爆時の状況や当時の生活を示す写真や遺品を目にしました。核兵器が人々の命や暮らしを一瞬で奪ったことを強く実感し、胸が痛みました。資料館での学びは、平和を守る大切さや難しさを深く考えるきっかけとなりました。

派遣事業から戻った後、もう一つの被爆地である広島に住んでいる叔父から、「自分は被爆二世なんだ。」と打ち明けられました。私はそのことを全く知らなかったもので、とても驚きました。被爆二世であることは、差別や偏見につながってしまうおそれがあり、これまで語られなかったのだと思います。それでも、私に真実を伝えてくれたのは、学校の仲間や次の世代に、戦争や核兵器のことを語り継いでほしいという願いがあったからだと感じました。叔父の思いも受け止め、長崎で学んだこと、感じたこととともに、私自身が平和をつなぐ役割を果たしたいと思います。

中学生報告書

「長崎に行って感じたこと」

豊島区立池袋中学校 2年 藤原 悠真

いつもの日常が始まるはずだった1945年8月9日11時2分、長崎に原爆が投下されました。

被爆者の方からお聞きした話では、ピカーッと何かが光り、それと同時に強い衝撃を感じたそうです。そして、約4000℃の熱線と熱風で、一瞬にして何も罪のない多くの人々を灰と化してしまいました。犠牲となった人々は、なぜ自分があの様な死に方をしなくてはならなかったのかさえも分からないまま、多くの尊い命が奪われてしまいました。命からがら生き残った人々も全身にやけどを負い、皮膚はただれ落ち、ガラスが身体全身に刺さり、あまりの熱さで水を求め川に入りましたが、空からは爆弾の破片が降り注ぎ、逃げ場もなく想像を絶する生き地獄だったと聞きました。

実際の写真を見た時は胸が締め付けられ、直視できませんでした。戦後80年の節目を迎えましたが、今でも被爆の後遺症で髪の毛が抜け落ち、歯茎から血が出るなどの苦しみが続き、心と体に大きな傷を抱え苦しんでいる人がいることを知り、この事をみんなに知って欲しいと思いました。そして80年前の広島、長崎が受けた被爆の悲惨さを、あの日何が起こったのか語れないまま亡くなった人々の分まで僕たち若い世代が語り継いでいかなければならないと思いました。

世界では今も戦争が起こり、多くの子供や民間人が犠牲となっています。強く打てば相手も強く打ち返してくるし、そして、何よりも恐ろしいのは「核兵器」使用の緊張も高まりつつあることです。どんな状況でも「絶対に戦争を始めてはならない」こと、「核兵器を使ってはいけない」こと、世界から核兵器が廃絶された時にこそ本当の意味での平和が訪れると思います。

そして唯一の被爆国である日本ができることは何か？僕たちができることは何か？と考えたとき、僕たちにできることは日々の生活の中で友達や家族、周りの人たちに思いやりをもち接することだと思います。たとえそれが個人の小さな行為であっても、相手を認め、寄り添い、一人一人が優しさと思いやりの気持ちをもち続ければ平和な世界につながると思ったからです。80年前のあの日、絶望の中でも希望の光を見つけようと諦めずに命を繋いでくれたおじいちゃん、おばあちゃん。その方々が懸命に生きてくれたおかげで今の僕たちの命が繋がっていると思います。

この夏に長崎を訪れる前までは自分にとっては「平和が当たり前」だと思っていましたが、長崎平和式典や被爆者の方の貴重なお話を聞かせていただき、壮絶な戦争や原爆の犠牲があった過去を知りました。

今、僕たちは学校で英語を学んでいます。将来は海外に行き、留学など国際交流もしていこうと思います。当時の目撃者ではないけれど、記憶の証言者としてどんなに月日が経とうとも「核兵器」の恐ろしさ、日本が受けた原爆の悲劇を忘れないように一人でも多くの人に語り伝えていきたいと思っています。

